東京新聞
八百七十六号
續巻物の古狐夜行い葉頭の怪巳して赤本の
重ひ鳥籠い欲の化るるるべしりの頃乃
御布告乃 野夫と変化い函根こら先の住居
と岩谷一統兼知の上で境界う定ま古いるノでる
鬼の業と極ておき。少し開と中古い狐狸の丹い一切化へこら次と規則が定う。今い
中く幼童ま人。モンガアと始じても。其手い食りぬ開化の 聖代野良頭が散髪ま
化るが初發で電信茶飯。練化造ものと追く開け悉皆有用人智の化るの
無用の怪奇嚴禁の中ふとうーーと間違ま地名い武州秩父在横瀬
村の農民 鉢山権右エ門と言ふ者の居宅へ何者ぞも知ま次
毎夜礫と打込ものこう 兎ど茶釜が野鍋迄 天井裏へ
引揚ー 怪事ふ人、驚ーと其近傍の剣客者
飯塚某是と聞見顕うんと
立越ー、主人ふ對話の
折柄ふ一ツの大石
飛来り頭上ど
ぬすりて後背ある
大釜盥座ふ打碎
はべーこちらの飯塚仰天ふーーーー
其場ど逃帰ど が怪事いまずー止ざり
乃是い開化と怪化と見誤ど狐狸の手段
るべー
一雲居西岸
温古墨龍吟
薫齋芳幾
人形見立
彫春